

[優秀賞]

黒丸 拓磨さんレビュー (秋田市)

書評対象作品

『アフガニスタンの診療所から』中村 哲 著 (筑摩書房)

「追悼 中村哲医師」

帯に書かれたこの言葉が、書店の中を歩く私の目を引いた。

中村哲医師は1946年に福岡県で生まれた。九州大学医学部を卒業後は医師となり、1984年にはパキスタンのペシャワールへ赴任した。その後はアフガン地域の貧困層の診療などに取り組み、途上国の衛生問題や医療問題に長きにわたり携わってきたが、2019年12月4日、アフガニスタン国内で銃撃されこの世を去った。

この本では中村氏がアフガニスタンで行った医療活動や、アフガン文化圏の農村部に住む人々の暮らしについて説明されている。中村氏のアフガニスタンでの体験は、国際協力のあるべき姿を私たちに映し出す。

中村氏が尽力したのが、現地におけるらい病患者根絶のための活動である。らい病は細菌感染症の一種であり、日本ではハンセン病と呼ばれる。皮膚や末梢神経に作用する病気であり、顔面の変形や感覚障害などの症状がある。外見が変化する症状は、差別の原因となる場合もある。

中村氏は現地で多くのらい病患者と向き合った。鼻はくぼみ顔面が歪み、言葉にできないトラウマを抱えた女性。指も頭髪も失い、故郷を追い出された男性。物資の支援だけでは救うことができない、多くの患者と向き合った。

国際協力において最も必要なものは、大規模な資金援助や物資提供といった即物的なものではない。本当に必要なものは、助けたい存在の顔をそばで直接見つめ、相手が自力で立ち直るまで粘り強く手助けをしようとする心構えである。そのことを、中村氏は教えてくれる。

この事実は、多くの人と向き合いながら日々を過ごす、あらゆる人間に示唆を与える。周りに悩む人がいるならば、苦しみを分かち合うべきではないか。

「追悼 中村哲医師」

本を読み終えたときこの言葉は、帯に書かれたキャッチコピーから、誰よりも人の心を想った一人の医師を偲ぶ言葉へと変わっていた。

人助けの道標となるものを示してくれるこの本を、ぜひ手に取っていただきたい。